
ハイスクールD×D Ⅱ 銀髪の修羅 Ⅱ (仮)

§ 夜神 §

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D＋銀髪の修羅＋（仮）

【Nコード】

N6174X

【作者名】

S夜神S

【あらすじ】

神になる為最後の旅にでる。

旅先は、ハイスクールD×D

Prologue (前書き)

初めまして

キ夜神キです。

至らぬこともあるかと思いますが宜しくお願いします。

お手数ではありますが誤字脱字があったら感想のほうにお願いします。
す。

Prologue

§

真っ白の空間に一人の青年が横たわって居た。

「……此処は何処だ。……知らないてんじ「何を言ってるの。お帰りなさい。」yo」

声のした方を見ると二人の人間？がいた。

一人は、男性、もう一人は、女性、所謂夫婦である。

「ああ、ただいまイザナミ、イザナギ。」

「よく帰って来た。我が友よ。」

美男であるこの男の名は、イザナギ。

「ええ、お帰りなさい。」

そして美人であるこの女性の名は、イザナミ。

「やっとだ、やっと次で最後。次が終わったら至る。……しかし、最初出会ってから何年だ？」

俺は、二人に初めて出逢った時を思いだす。

そう、初めて逢ったのは、俺が人間の時、交通事故で死んだ俺は、輪廻の輪から外れ、この『あの世』と『この世』の狭間の世界、に迷い込んでしまった。そんな時、イザナギとイザナミの二人に発見、保護された。その時、打ち明けられた真実は、あの伊邪那美大神と伊邪那岐大神である、と云う神様だった。

それからと云うものの数ヶ月もの間、イザナギとイザナミそして俺の三人は、狭間の世界で家族として過ごした。

そしてイザナミ、イザナギの二人から、神に成らないかと言われた。

《まあ、神といっても最初から神になるのでは無くまずは人から神格者になりそして神へ至る。》

イザナミ、イザナギに勧められ神になることを決意した俺だが決意したのは良かった、良かったがその後が酷かった。

それから、数百年イザナギとイザナミの両神様に修行を付けもらった。

イザナギからは武器の扱い方から実戦形式の戦闘、戦闘の心得など戦い方を中心に教わり、イザナミからは、神に備わっている神力と魔に備わっている魔力の使い方と戦闘の時に使える戦術、戦法それに伴い膨大な知識を教わった。他にもいろんな神様の話や神様どうしの付き合い方、それに他の神との交流もした。

そして、一通り修行が終わった。

後は、神に至るためにいろいろな世界に行き、神としての経験を積み、その世界を、『見て』、『触れて』、『感じる』この繰り返しを約百回くらいやる。

そしてやっと神の一番下である。

「いやあ、余り思い出したくねえな。まったく修行のときイザナギは、殺す気で戦闘するし、イザナミはテストやった時一問でも間違えたら鬼も逃げる感じで怒るで大変だった。」

「それは、お主が物覚えが悪いから仕方なく体に教えたまで。」

「そうだ、私達を怒らせるお主が悪い。」

イザナミとイザナギは、楽しそうに笑っている。

「まあ、いいか。それじゃ俺は少し休む。」

ガシッ

「まあ、待て此れから酒を呑もうではないか。なあ我が友。」

「はあ？俺は、今帰って来たばかりで疲れてんのわかる？」

「ダメじゃ。これからすぐ三人で宴会じゃ。」

俺は、二人に捕まり強制的に宴会の席に座らされ二人に酌をしながら結局、自分も少しずつではあるが酒を呑んだ。

青年は、自分が笑っている事に気づいていなかった。

そんな、楽しい時間は過ぎて行く。

伊邪那岐 side

我が友が、帰って来た。

初めて逢った時は、ただ面白半分と、興味半分で我が友と出会った。

話をしてみたら面白い奴で仲良くなるのにそんなに、時間は掛からなかった。

そんな、我が友と出会い時間が経つに連れて別れるには、どうしても惜しい存在だった。

だから、困難な道かもしれぬが我等と同じく神となって欲しいと思った。

この感情は、我の一方的な願いであった。それでもガマン出来ず言ってしまった。

そしたら意外にも、我が友は神になることを承諾してくれた。

この時、表情には出さなかったが、凄く嬉しかった。こんな感情久しぶりだ、と思った。

其れからしばらく、妻のイザナミと一緒に我が友を神の領域に近づけるべく教育？修行？をした。

修行は楽しかった。

あんなに力を入れて教えた事も無かった。

最後の頃には、本気の戦闘で我に勝てはしないまでもいい勝負をするくらいのバケモノになった。

そんなこんなで、我が友も着々と神になれるよう階段を上っていった。

はてさて色々と思い出していたがそろそろ我が友が出立するようだ。

この旅が、終われば漸く我等と同じ神になれる。

漸くだな我が友。

伊邪那岐 side out

side 主人公

あの宴会から早一年、その間イザナギとの稽古をしたりイザナミと将棋をしたり他の神達と話しをしたりと楽しく過ごした。

そして今日、最後の旅にでる。

この旅が、終われば漸くイザナギ達と同じ神の領域に達する。

長かった。凄く長かった。

「それじゃ、行くか。」

「行くのか？」

イザナギとイザナミ、親しくしてくれた神達が出立する俺の応援に来てくれた。

「今回は、何処の世界に行くんだ？それは、まあいい怪我無く無事で帰って来い。帰って来たら漸く私達と同じ神に至る。」

イザナギが俺を鼓舞してくれた。

「まあ、待ってろすぐ帰って来てやる。

それじゃ

またな」

そして、俺は旅に出た。

行き先は、

ハイスクールD×Dの世界。

life. 1 (前書き)

どもども

夜神です。

今回も読んでくださりありがとうございます。

お手数では有りますが誤字脱字は、感想の方をお願い致します。

life. 1

+

sideセフィロス

「此処は、何処だ？」

辺りを見渡して見ると木、樹、山、辺りは森と山しかない。

「どっかの山の中か？しかし、目線が前より低いな。5〜6歳ぐらいか？」

たしか、世界に入っている時は、世界に対して余り負荷を掛けないようにするために年齢を下げるんだったかな。

「さて、元の姿に戻るかなと……やっぱりこっちの方が目線が高いな。当たり前か。」

大体、20前後の青年の姿で黒の着流しを着ているセフィロス。

空を見上げて見ると赤かった。

「……なんで空が赤いんでしょうかね。……さっさとでて来たらどうですか？」

後ろの木に隠れて居た赤髪の男性が出てきた。

外見年齢は、近いかな？しかしこいつ結構やるな。

イケメンだなこいつ、モテるんだろうな。

「私は、セフィロス・ギルフォード。後、セフィロスと呼んでください。貴方の名前を聞いても？」

「私の名は、ルシファア、サーゼクス・ルシファアだ。レイ、君は此処で何をしている。」

「いきなり目の前に現れた空間に、引きずり込まれたんです。そして、目が覚めたらこんな何処に居た。」

しかし、こんな嘘通じるかね。本当は、異世界からの神に近い存在なんだが、

それに、当初の予定では、山奥で体を慣らすため修行でもしようかと思っていたが最初から計画破綻してるし。山奥で体を慣らすため修行でもしようかと思っていたが最初から計画破綻してるし。

其れに、体の中にちよつと違和感があるのも気になるしな。

「わかった。もう一つ質問だ。セフィロス、君は何者だい？君は普通の人では無いように感じるが。」

「私は、聖と魔、人の混血です。人の身に在らざる力を宿した者。」

「そうか、君は色々大変な人生を送って居るようだね。よし、ならば私の家に来ないか？歓迎するよ。それと私の妹に会ってやってくれ。きっと喜ぶ。」

「良いのか？こんな私を連れて。私は、危険かも知れないぞ。」

「君は、大丈夫だよ。それに本当に危険な奴は、自分は危険だって言わないよ。」

なんだよこいつ良い奴じゃないか全く。

だが、人を疑うって云うのを知らないのか？いや、違うな疑っているからこそ自分の近い場所に置いて置く。そんな感じかな。

まあ其れでも、こんな所も、モテる要因なのかね。

「それじゃ、改めて。セフィロス・ギルフォードだ。宜しく頼むサ―ゼクス。」

「ああ。此方も改めてサーゼクス・ルシファーだ。歓迎するよセフィロス。」

俺とサーゼクスは、並んで歩いた。

s i d e o u t

サーゼクス s i d e

私は、サーゼクス・ルシファー。ルシファーの名を継承した魔王だ。

日頃から四大魔王の一人という肩書きを背負い日々を過ごしている。

私は日頃の疲れを取る為近くの森の中を歩いていた。そんな時、近くで誰かが冥界に落ちた反応があった。反応があった場所にすぐに向かった。

一人の青年がいた。

私は、観察する為に近くの木に身を隠した。

青年は、身長は高いが見た感じ体のラインが細いように窺える。
髪は銀色、で腰辺りまで伸ばしてある。服は、黒の着流しで武器の類いは、見た限りでは持っていない。

「……………さっさと出て来たらどうだ。」

気付かれた？

私は、出来る限り気配を断っていたし、木に隠れてから一切動いていなかった筈だ。

しかし、辺りには私と彼以外誰の気配すらしない。

彼の前に出る。

彼の名は、セフィロス・ギルフォードというらしい。

セフィロスの正面に立ってわかった、セフィロスは紅い瞳をしていた。

其れも私の髪の色と間違い少し明るい感じの紅だ。

彼、いやセフィロスは、喋り方がちょっと固いように感じたが私も対して変わらないな、と思った。

セフィロスと話して家に来てもらう事にした。

なんで、セフィロスは混血であるらしい。まあ私からすればどうでもいい事なのだがね。

二人で歩いているといつの間にか私の家に着いていた。

さて、レイは家を見てどんな表情を浮かべるのか楽しみだ。

それでは、行くとしよう。

s i d e o u t

s i d e セフィロス

俺は、サーゼクスの家に向かうべく結構歩いた。そしたら、大きな街が見えてきた。

街は、凄い賑わいで此処に暮らして居るであろう人達は、みんな笑っていた。

「此処を治めている人は、有能な方なのだろうな。」

そんな呟きは、サーゼクスには聞こえてはいなかったようだ。

すると、サーゼクスが急に止まるからどうしたのかと思いサーゼクスを見ると何故かある方向を指差した。

その、方向を見ると凄く巨大な城らしきものが建っていたのだ。

庭には、美しい花々が咲き誇り、噴水まである。

「あの城が、私の家だよセフィロス。」

マジですか？

サーゼクスの奴、何者なんだ？

しかし、その事を考える事など出来ないほど城に対してビックリしていた。

うん。仕方がないと思う。

俺は悪くない。

s
i
d
e
o
u
t

life, 2

✱

sideセフィロス

やあ俺は、セフィロス・ギルフォード
今、サーゼクスの家だと思われる場所にいたりします。

しかし、

「こんな巨大でキレイな城、初めて見た。」

俺は、ビックリして無意識でそんな感想を言っていた。

「クククッ。そんなにビックリしたのかい？連れて来た甲斐があったよ。」

そうだった。

俺とした事が、サーゼクスが、隣にいることをすっかり忘れていた。

「本当に、此処がサーゼクスの家なんだよな？嘘なんかじゃ無いよな？」

「ああ。此処が、私の家だよ。さあ、セフィロスはやく中に入ろ。」

俺は、サーゼクスの後ろに付き巨大な城の中に入った。

城の周りには、キレイ草花が咲き誇り、彫刻が彫られたデカイ噴水があったりと、ビックリする事ばかりだ。

城の、玄関でいいのか？扉をサーゼクスが開けたら、

「「お帰りなさいませ、サーゼクスさま。」」

扉を開け、玄関ホールには大勢の使用人？（メイド）の人達が一斉に声を挙げた。

しかし、どれだけのメイドさんがいるのやら。出迎えてくれた人達、以外にもまだいるんだろうなあ。

俺は、客間に案内されてサーゼクスは自室で着替えて来るらしい。

サーゼクスが、戻つくと一人女性？を連れて来た。

女性の髪の色が、サーゼクスとは違い亜麻色で、出る所は出て、締まる所は締まった体型、少し目つきがキツイが美人さんである。

「やあ。待たせたね、セフィロス。寛でいるかい？」

「いや、そんなに待っていないよ。其れより、その女性がサーゼクスの妹さんかな？キレイな方じゃないか。」

すると、二人がキョトンとした顔で俺を見てきた。

「あらあら、キレイな方だなんてうれしいことをおっしゃってくださいますのね。」

頬に手をやり微笑む妹さん。そんな微笑んだ顔は、より一層彼女の魅力を引き出していた。

「……クククッ。セフィロス、違うよ。この方は、私の母上だ。妹では、ないよ。」

「……えっ。は、は、母上だと。本当なのかサーゼクス。」

「ええ。サーゼクスは、私の息子ですわ。そして私は、ヴェネラ・グレモリーですわ。よろしくね、セフィロス・ギルフォードさん」

そんな、ヴェネラさんに挨拶をし、泊まらせてもらっても良いか聞きました。

その後、此処はどんな場所かなどサーゼクスに質問しまくった。

曰わく

此処は、冥界と呼ばれる場所で、悪魔、堕天使が暮らしている。地球（人間界）とほぼ同等の広さをもつ紫色の空の異世界。海が存在しないために陸地は人間界の大陸より遥かに広い。

曰わく

サーゼクスは、四大魔王と呼ばれていて、悪魔をまとめている存在らしい。

曰わく

グレモリー家は、現ルシファアを輩出した名門。

強力な魔力と、紅い髪を持つのが特徴。

深い情愛を持ち、眷属を慈しむ一族。

日本の本州と同程度の面積の領土を持ち、広大な眷属用の城を幾つも持つ。領地の特産品は非常に評判がよく産業も発達してお

り非常に豊かしい。

他にもいろいろ聞いたが、それはまた機会があったら。

その後メイドさんには、この家の中を少しとゲストルームに案内してもらった。

数時間後、夕食の用意ができたとメイドさんがやってきた。

いよいよ、サーゼクスの妹さんとの、ご対面する事ができる。

メイドさんに、ついて行き入った部屋には、四人いた。一人は、サーゼクスでもう一人は、先ほどあったヴェネラナさん。あとの二人は、初めてだな。

「私は、セフィロス・ギルフォードと申します。今回は、お世話になります。」

「話は、聞いているよセフィロス・ギルフォード君。私は、サーゼクスとこの娘、リアスの父だ。それと今日だけではなく、好きなかけゆつくりしていきなさい。」

「はじめまして、セフィロスさん、リアス・グレモリーです。」

目をキラキラ輝かせて此方を見てくる。
その瞳は、純粹で一切曇りの無い瞳だ。

「はじめまして、リアス・グレモリー。セフィロス・ギルフォード。
以後、お見知りおきを。」

その後、一通り俺の事を話した。そして一家に一人足し、夕食を
食べ団欒を楽しんだ。

居候して数ヶ月、いろいろあった、リアスと仲良くなったり、現
四大魔王の一人セラフオール・レヴィアタンとの出会い。元龍王で
最上級悪魔のタンニーンとの出会い。

そんな出会いから少し俺は、グレモリー家から信頼され監視の者
もいなくなった。

リアスとも仲良くなり、俺の事を兄さんと呼ぶようになった。

グレモリー卿曰わく

もう一人息子ができたみたいだ、らしい。ヴェネラナさんも同じように思っているらしい。

そして、今日。

俺は、タンニーンの前で修行するために荷造りしていた。

「それじゃ、サーゼクス、ヴェネラナさん、リアスっていきます。」

「行ってこい。またな。ゼス」

「いつでも、帰ってきなさい。」

「兄さん気をつけてね。」

上から、サーゼクス、ヴェネラナさん、リアスの順である。

親しい者には、ゼスと呼ばせるようにした。

そして、手を振りながら家を後にした。

side out

side リアス

ゼス兄さんが修行に行ってしまった。

義兄さんに、初めてあったのは、数ヶ月前。

会った際の、第一印象は、少し怖かった。

服は、全て黒色で統一していて目つきも少し鋭いような感じがしたが、銀髪と黒い服そして朱い瞳が似合っていてカッコイイと思った。

其れから、ゼス兄さんが暇な時には、遊んだりもしたし、一緒にお昼寝もした。

仲良くなるのに、そんなに時間は掛からなかった。

いつ頃からかわからないけど、ゼス兄さんの姿を見ると胸がドキドキすることがある。ただ、別に危ない所を助けてもらったという事は無かった。隣に居てくれるのが当たり前のような感覚がある。

これが、恋という物なのかわからないけどたぶん私は、ゼス兄さんが好きなんだと思った。

そして今日、兄さんは、修行しにタンニンの元に行った。帰ってくるのは何時になるのかはわからない。

凄く寂しいけど笑って見送った。

また、会えるよねセフィロス。

今度会えるのを楽しみにしているわ。

あなたを絶対私の物にしてみせるんだからね。

side out

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6174x/>

ハイスクールD×D†銀髪の修羅†（仮）

2011年11月16日02時40分発行